

熊谷市妻沼地区における地域連携による教育活動の展開と課題

片 柳 勉*

キーワード：地理学科、教育活動、地域連携、地域貢献、熊谷市、妻沼地区

I. はじめに

1. 地域連携による教育活動

大学は地域社会の一員として、従来からさまざまな社会貢献活動を行ってきた。その取り組みは、各種専門委員会や審議会への委員の派遣、生涯学習講座への講師の派遣、公開講座の実施、大学施設の開放、産学連携による共同研究など多岐にわたる。これらの活動の根底にあるものは、大学の基本的機能は研究・教育にあり、大学が有する知的財産を社会に還元するという意識であった。2000年代に入る頃から、中心市街地の再生や環境保全などをテーマに大学が地域との連携を進める事例が増えてきた（鈴木 2004；小林ほか編 2008）。なかには、地域との連携を全学的な取り組みに位置づける大学がみられたが¹⁾、連携における大学側の主体の多くは一部のゼミや研究室、個人の研究者であった。

こうしたなか、2005年1月の中央教育審議会答申「我が国の高等教育の将来像」のなかで、社会貢献は大学の「第三の使命」とされたことにより、地域との連携をより一層深めることが大学教育の方向性として示された。この答申以降、全国の大学は学内に留まることなく、地域に直接入り込み、地域の課題に対応することが求められるようになった²⁾。文部科学省では、2013年度から「地（知）の拠点化事業」を推進するため、地域を志向する研究・教育・社会貢献を進める大学を支援する取り組みを始めている。このような背景もあり、国立大学を中心に、地域との協働を教育の中心に据える学部を新たに設置する大学が相次いだ³⁾。

大学と地域との連携強化が示されたほぼ同時期、大学教育は授業方法において大きな転換点を迎えた。2012年8月の中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」において、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法が必要とされ、大学教育においてアクティブラーニングが推進されることとなった。同答申では地域・企業参画型の新たな

連携・協力に取り組むことが重要であると述べ、地域との連携も視野に入れている。ここで地域と連携した教育についてみると、既に教育系大学ではプロジェクト学習科目のなかに地域との連携を取り入れた結果、学生の主体的学習において一定の効果がみられたと報告している（地域と連携する大学教育研究会編、2012）。また、大学が所在する地域との連携による教育活動を先行させる大学でも、同様の効果を認めている（熊倉ほか編 2010；大西ほか編 2016）。これらの先行事例は、地域での異なる世代との交流が学生の主体的学びにつながっていることを示している。地域連携による教育活動は、学生の主体性、コミュニケーション能力、課題探求能力の向上が期待できるといえよう。

そこで、立正大学地理学科に所属する筆者は、大学が所在する自治体（熊谷市）において地域連携を取り入れた教育活動を実施することとした。活動のねらいは、地域での学びを通じて学生の成長を促し、併せて地域に貢献することにある。本稿では、2012年度から5年間にわたって続けてきた地域連携による教育活動の取り組みを紹介し、続いて参加学生に対して行った事後アンケートの分析結果について述べる。最後に、授業を実践するなかで見えてきた意義と課題について検討する。

筆者の地域連携による教育活動は、学部3年生の正課授業である「地理学セミナーⅠ（前期）」「地理学セミナーⅡ（後期）」「フィールドワークⅡ（集中）」の一連の授業で行ってきた。上記の3つの授業は担当教員によって進め方が異なるものの、目的とするところは授業シラバスで統一されている。それは、「地域の現状分析と課題の把握、解決策の提示に至るまでの一連の作業のなかで、グループワーク、討論、結果の発表を通じて、学生の主体性、コミュニケーション能力、課題探求能力の向上を図る」ことにある。筆者が担当する都市地理学分野のセミナーでは地域活性化とまちづくりをテーマとし、2年次までに学んできた地理学の調査スキルを実践的に修得すること、主体的な学びの姿勢を身につけるこ

* 立正大学地球環境科学部

とを学びのうえでの到達目標とした。

授業では、熊谷市妻沼地区（以下、妻沼地区）を実習地とし、地元の商工会組織「くまがや市商工会妻沼支所」、地元の若手経営者が集まった組織で多様なまちづくり活動を行う「めぬま商人会（あきんどかい）」、妻沼地区に位置する道の駅「めぬま」と連携し、協力を得ることとした（図1）。連携の関係者には主に次の役割を担って

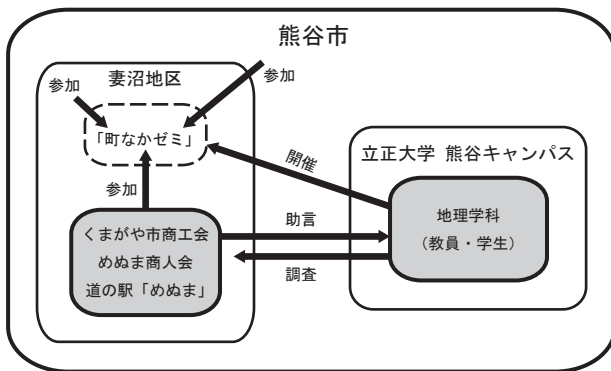


図1 地域連携による教育活動の体制

注：めぬま商人会との連携は2013年度から、道の駅「めぬま」との連携は2015年度から開始した。

いただいた。①学生を対象としたまちづくり勉強会の講師、②学生が行う調査への助言、③現地での学習・作業スペースの提供、④実習地で開催する「町なかゼミ」⁴⁾への参加などである。授業の進め方として、前期の「地理学セミナーⅠ」で地域調査の手法の確認および課題テーマと実習地域について事前学習を重ね、「フィールドワークⅡ」で現地調査に出かけた。フィールドワークは日帰り、年5回程度実施した。後期の「地理学セミナーⅡ」は主に成果の取りまとめにあてた。

具体的な活動内容を紹介する前に、「地域連携」および「地域貢献」の用語の内容を明確にしておく。地域連携と地域貢献との関連で当該授業のシラバスの「授業の目的」を読み替えると、地域の現状分析と課題の把握、解決策の提示が地域への貢献につながり、この一連の作業を地域と連携しながら進めることで、学習効果が高まると考えることができる。したがって、地域連携とは地域での学習を効果的に進めるため、作業で得られた成果を地域に還元するための一手法、すなわち地域貢献のための手法といえよう。これについて、手塚ほか（2010）は地域貢献の単位認定化をテーマとした論考のなかで、「ここで言う地域貢献とは、学生が、地域が抱える諸問題の発見とその解決に向けて、地域の人々（市民）と協力しながら行う活動を指している」と述べており、地域での活動そのものを地域貢献と位置づけている。この考

え方は、本稿での地域貢献の捉え方に等しい。なお、本稿における地域連携の「地域」には、連携の一主体としての大学に加え、地域の関係者である行政、地元の商工業者や商工会、NPO法人、地域住民を含む。

2. 地域連携の場としての妻沼地区

妻沼地区は埼玉県北部に位置し、その中心市街地はJR熊谷駅から約10kmの距離にある（図2）。江戸期には妻沼聖天山の門前町、新田往還の宿場、利根川舟運の河岸として発展し、明治期以降も地域の中心として繁栄してきた。第2次世界大戦中に熊谷市と結ぶ東武鉄道熊谷線が開業したが、1983年に廃線となり、現在はバス便で熊谷と結ばれている。2005年に妻沼町は熊谷市・大里町と合併し、その後2007年に熊谷市が江南町と合併し現在に至っている。

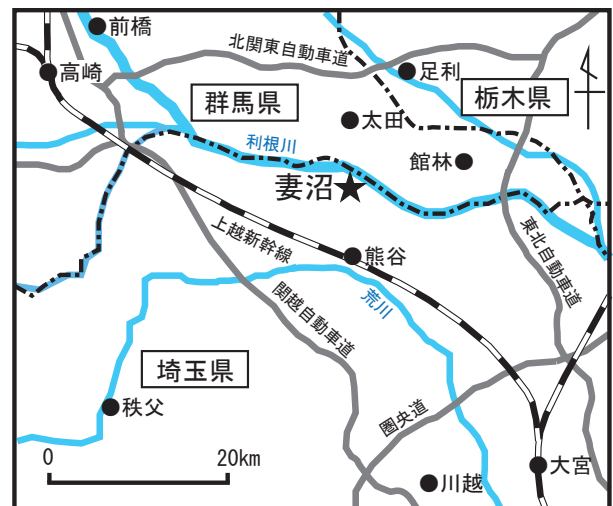


図2 妻沼地区の位置

妻沼地区でまちづくりが活発化する時期は、妻沼聖天山の修復工事の時期と重なる。聖天山本殿では、2002年10月の調査工事開始から2010年9月の完成引渡しまでの8年におよぶ「平成の大修復工事」が行われ、これにより建立当時の姿によみがえった。妻沼商工会（現くまがや市商工会妻沼支所）では、2010年の聖天山本殿保存修理工事の完了にあわせて、「縁結び」をイメージした「えんむちゃん」をキャラクターに決定した。また、「縁結び関連事業」（2010年度）、「縁結びのまち妻沼推進事業」（2011年度）のそれぞれに市の補助を受け、縁結び関連の商品開発、さらには観光関連業者へのPRなどを行ってきた。個人事業者のなかには、商工会を通じて経営革新の制度を利用し、古民家を改修して店舗を開くところも出てきた。

妻沼地区は熊谷市北部の中心として機能するものの、地区の人口は減少傾向にあり⁵⁾、商店街では空き店舗が増加している。妻沼地区は種々の地域課題を抱えているなかで、聖天山の大修復工事を契機に地域の関係者が地域活性化に向けてさまざまな取り組みを行っており、まちづくりをテーマとした地域連携による教育活動を展開するに相応しい場所と考えた次第である。

3. 地域連携による教育活動の概要

2012年度から2016年度の5年間の活動を表1に示した。2012年度と2013年度の活動は、地域課題の把握と地域資源の掘り起こしを主要なテーマとし、地域資源および地域改善に関する調査を実施した。その結果を地図化し、妻沼地区で開催した「町なかゼミ」および立正大学熊谷キャンパス内で開催した「産学官連携まちづくりフォーラム」⁶⁾で発表した。なお、2013年度からは、社会貢献の一環として、作成した成果物（観光マップ、観光パンフレット等）を発行・配布している。「めぬま商人会」との正式な連携は2013年度からである。

2014年度の活動では、主に妻沼地区の人物を紹介する観光パンフレットを制作した。それまでの景観観察を中心とした現地調査とは異なり、インタビューによる調査が中心となった。また、2014年度からは、観光振興への実践的な貢献として、学生が主体となって運営する観光案内デスク（夏期休暇中・地域イベント時）を設置した。

2015年度からは、新たに道の駅「めぬま」との連携を

始めた。妻沼中心市街地の南西約1.5kmに位置する道の駅「めぬま」を妻沼地区における地域情報発信の拠点と位置づけ、妻沼中心市街地の活性化と結びつける活動を行った。内容は観光マップの作成、観光案内デスクの設置などである。2016年度の活動では、道の駅「めぬま」との連携を継続し、妻沼地区の情報発信強化をテーマに観光パンフレットおよび観光PR動画の作成、併せて外国人（留学生）対象モニターツアーを実施した。なお、2015年度・2016年度の活動では、自然環境観察の学生グループとも連携した。各年度における教育活動の詳細については、次章で述べることとする。

II. 妻沼地区における教育活動の経過

1. 2012年度の活動

（1）地域連携活動の開始

筆者は、熊谷市景観審議会委員の一人として、市主催の「妻沼景観まちあるき」（2011年10月8日実施）に参加する機会を得た。妻沼地区の訪問は初めてのことであったが、中心商店街の衰退は著しく、道路沿いには空き店舗、空き地、廃屋が目立っていた。まちあるきの最後に、平成の大修理後の妻沼聖天山を拝観した。市街地の活気のなさとは対照的に、修復直後の本殿がきらびやかで参拝客で賑わっていた。境内では、まちあるきのイベントに合わせて、地元の方々が様々な活動をしていた。そこで妻沼地区のまちづくり活動のキーパーソンの一人

表1 地域連携による教育活動の概要（2012年度～2016年度）

事項	2012年度（初年度）	2013年度	2014年度	2015年度	2016年度
学生数	11名	18名	14名	13名	18名
連携先	くまがや市商工会妻沼支所	くまがや市商工会妻沼支所 めぬま商人会	くまがや市商工会妻沼支所 めぬま商人会	くまがや市商工会妻沼支所 めぬま商人会 道の駅「めぬま」	くまがや市商工会妻沼支所 めぬま商人会 道の駅「めぬま」
ゼミテーマ	まちづくりの実践	まちづくりへの貢献	まちづくりへの貢献	観光まちづくりへの貢献	観光まちづくりへの貢献
プロジェクト	地域課題の把握 地域資源の掘り起こし	地域課題の把握 地域資源の掘り起こし	地域資源の掘り起こし 観光情報の発信	道の駅の情報拠点化 観光情報の発信	観光情報の発信 モニターツアーの実施
イベントへの参加			熊谷妻沼手づくり市 熊谷妻沼昭和まつり	熊谷妻沼手づくり市 熊谷妻沼昭和まつり	熊谷妻沼手づくり市 えだ豆収穫祭
観光情報の提供			観光案内デスクの設置 （イベント会場）	観光案内デスクの設置 （イベント会場・道の駅内）	観光案内デスクの設置 （イベント会場・道の駅内）
地域住民との交流	町なかゼミの実施	町なかゼミの実施	町なかゼミの実施	町なかゼミの実施	町なかゼミの実施
活動の成果	めぬまっぷ2012（地域資源編） めぬまっぷ2012（地域改善編）	めぬま地域資源マップ2013 めぬま地域改善マップ2013 めぬま町歩きマップ（グルメ編） めぬま町歩きマップ（女子力編）	『めぬま観光読本。』	妻沼観光案内図 妻沼まちあるきマップ	観光パンフレット「めぬまっち」 観光PR動画 留学生対象モニターツアー
成果の発表	産学官連携まちづくりフォーラム（熊谷市主催）	産学官連携まちづくりフォーラム（熊谷市主催）	成果報告・贈呈式（熊谷市役所）	成果報告・贈呈式（熊谷市役所） 道の駅と大学連携成果発表交流会（国土交通省主催）	成果報告・贈呈式（熊谷市役所） 道の駅と大学連携成果発表交流会（国土交通省主催）

である、くまがや市商工会妻沼支所経営指導員の廣瀬俊明氏を紹介された。その後、大学の地域貢献活動の一環として、妻沼地区で商工会と連携したゼミ活動を行いたい旨を廣瀬氏に伝えたところ、これに対して快く応じていただいた。

初年度（2012年度）の活動のテーマは「まちづくりの実践」という漠然としたもので、具体的には現場での実践的学習と地域貢献を考えていた。2012年度の活動を始めるにあたり、前年度の12月に参加学生を募集した。希望した学生は当初2名であったが、他のゼミの選考に漏れた学生を対象に再募集を行った結果、11名の学生の参加を得ることができた。まちづくりへの関心が決して高いとはいえない学生が集まった初年度の活動は手探りのスタートとなった。

教室内の授業で、地域調査の手法および実習地である妻沼地区の現状について事前学習を重ねた。また、妻沼地区を訪問したことのある学生はいなかったため、1年生との合同巡検を実施し、まずは地域の概観を知ってもらった。

初年度の活動として、妻沼地区の中心市街地⁷⁾を対象とし、地域課題の把握と地域資源の掘り起こしを行った。フィールドワークでは、各自が調査範囲内を歩き、それぞれが気付いた点を写真・スケッチ・位置情報とともに調査カードに記録した。それを大学に持ち帰り、ベースマップ（2千5百分の1の基本図）上で整理・集計した。しかし、ここで問題が発生した。調査に不慣れな学生が記録した位置が正確でなく、地図上で確認できないものが多数みられたのである。結果的に、この問題に対応するため何回か補足調査を行うこととなった。

試行錯誤を重ねて完成した初年度の成果が「めぬまっぷ2012（地域資源編）」（A4判）と「めぬまっぷ2012（地域改善編）」（A4判）である。位置の正確さにやや欠けるものの、学生の目線で妻沼地区の地域資源と地域の改善点を示した初めての地図となった。なお、マップの配布を地域関係者のみに留めたが、成果の一部は県道沿いの電柱の移設計画や公共施設の美化など、地域環境の改善につながった。

（2）「町なかゼミ」の開催

調査結果を地元に戻元するため、また今後の活動につなげるため、11月25日（日）に発表会（第1回「町なかゼミ」）を開催した。場所は、地元住民の参加を考慮して妻沼聖天山の南側道路沿いに位置する自治会館（池の上コミュニティセンター）とした（写真1）。当日の

学外参加者は12名（商店主、商工会職員、市役所職員、市議会議員ほか）であった。妻沼地区で初めての大学主催の発表会であったためか、多くの方に参加いただいた。



写真1 妻沼地区で初めて開催した発表会「町なかゼミ」
（2012年11月25日、筆者撮影）

まず、担当教員（筆者）から、活動の意図と調査の概要を説明し、次に学生から妻沼の地域資源および地域改善について報告した。最後に、教員から今後の予定について説明した。発表後の質疑応答では、地元の方から多くの意見・質問があった。主な意見では、「改善の指摘事項はもっともなことばかり。できるところから行っていきたい。大学（ゼミ）には、継続的な協力をお願いしたい」（M氏：街中ギャラリー発案者）、「商店街の若手で月に一度、会議をしている。是非とも若い人たちに加わって欲しい」（K氏：商店主）、「一つの歯車では動かないので、若い人に来て欲しい」（H氏：くまがや市商工会妻沼支所職員）などがあり、その後の大学の活動へ期待をにじませていた。このほか、「跡継ぎがいらないので看板を直すのは難しい」（H氏：自治会長）といった、妻沼地区の課題を端的に示す意見も出された。

また、学生に対して「現在、最も必要とするものは何か、また、早急に改善すべきものは何か」（S氏：市役所職員）との問いかけがあり、学生からは「気軽に入れるB級グルメの店。歩道が狭い危険な道」との回答があった。

ゼミ終了後の意見交換では、「町が消えていくのではないかと不安でしかたがない。若い人は妻沼をどう思っているのか知りたい」（S氏：商店主）、「妻沼でチャレンジ・ショップに取り組んで欲しい」（S氏：市役所職員）などの質問や意見があった。また、学生から「参加者が多く、積極的であった」「商店街の整備にはお金がかかるが、清掃にはお金がかからない。町に清潔感を出すすといと思った」などの意見が出された。

地元での初めての発表会（「町なかゼミ」）は、地域の

大学に対する期待の大きさを実感させるもので、その後の活動に対する学生と教員のモチベーションを高めることにつながった。

2. 2013年度の活動

(1) 地域資源の掘り起こしと学生提案

2013年度のゼミ活動では「まちづくりへの貢献」をメインテーマに掲げた。学生に対し、妻沼地区でのゼミ活動が地域連携による社会貢献であることをアピールし、

活動時のモチベーション向上につながるようにした。ゼミ生の募集では、40名を上回る希望者があり、選考の結果18名が履修することとなった。

現地では、前年度に引き続き妻沼地区の中心市街地を対象に、地域課題の把握と地域資源の掘り起こしを行った(表2)。また、現地調査に併せて「町なかゼミ」を複数回開催し、学生と連携関係者を含む地域住民とのあいだで調査結果に対する意見交換を行った(写真2)。前年度に教室内での集計作業に手間取ったことから、当

表2 フィールドワークと「町なかゼミ」の実施状況(2013年度)

月 日	事 項
5月19日(日)	調 査：妻沼地区の景観調査 参加者 学生18名(3年生18名)
6月9日(日)	調 査：主に県道沿い(商店街)の地域資源・地域改善に関する調査 ゼ ミ：内容 図上作業(位置の確認)、意見交換 場所 池の上コミュニティセンター(妻沼地区) 参加者 学生21名(3年生18名、4年生3名)、地元住民ほか6名
7月7日(日)	調 査：県道沿い以外(住宅地)の地域資源・地域改善に関する調査 ゼ ミ：内容 図上作業(位置の確認)、意見交換 場所 妻沼公民館 参加者 学生24名(3年生18名、2年生3名、4年生3名)、地元住民ほか11名
8月7日(水) ～9日(金)	調 査：県道沿い商店街の景観・空き店舗・空き地に関する調査 参加者 学生13名(3年生13名)
11月10日(日)	調 査：町歩きマップ制作に関する調査 ゼ ミ：内容 町歩きマップ原案の紹介、意見交換 場所 池の上コミュニティセンター(妻沼地区) 参加者 学生16名(3年生16名)、地元住民ほか6名



写真2 地元の方を招いて公民館で発表会「町なかゼミ」(2013年7月7日、筆者撮影)

年度の集計作業は夏期休暇中に現地で行った。記録の内容や位置があいまいなものについては、学生がその都度、当該地点に出かけて確認した。その結果、正確な地図を作成することができた。最終的に完成した地図が「めぬま地域資源マップ2013」(A4判)(図3)、「めぬま地域改善マップ2013」(A4判)(図4)である。

上記のマップをもとに、妻沼地区における地域特性と課題を探った。地域資源のキーワードに「手づくり」

「ぬくもり」「居心地(快適性)」「グルメ(スイーツ)」などがあげられた。また、地域改善のキーワードとして、「施設の維持管理不良」「空き店舗」「空き地」「建物の老朽化」などがあげられ、地区の将来像とする「美しく、活気ある町「めぬま」」⁸⁾に向けて妻沼地区が必要とする地域の改善点が明確となった。

以上の結果を踏まえ、2014年3月22日(土)に開催された「産学官連携まちづくりフォーラム」で妻沼地区に対する具体的な提案事項を発表した(写真3)。まず、妻沼地区全体に対して、「老朽化した看板・大型看板(パラペット)の撤去」「町並みに調和した統一屋外看板の設置」「手づくり風案内標識の整備」「沿道の野外アートギャラリー化」など、主に景観の改善について提案した。次に、空き家となっている坂田医院旧診療所(国登録有形文化財)の活用については、「まちづくり・観光・NPO活動の拠点化」「常時内部公開(映画・鉄道・荻野吟子関連)」「庭の整備とオープンカフェ化」「オブジェの設置」「駐車場の緑化」などの観光による地域活性化につながる提案を行った。最後に、これらの提案事項を

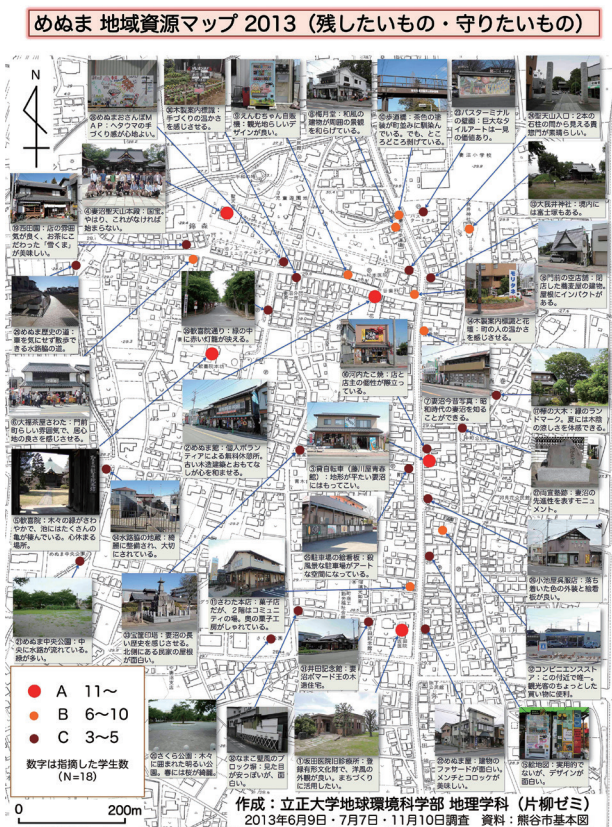


図3 「めめま地域資源マップ2013」(A4判)

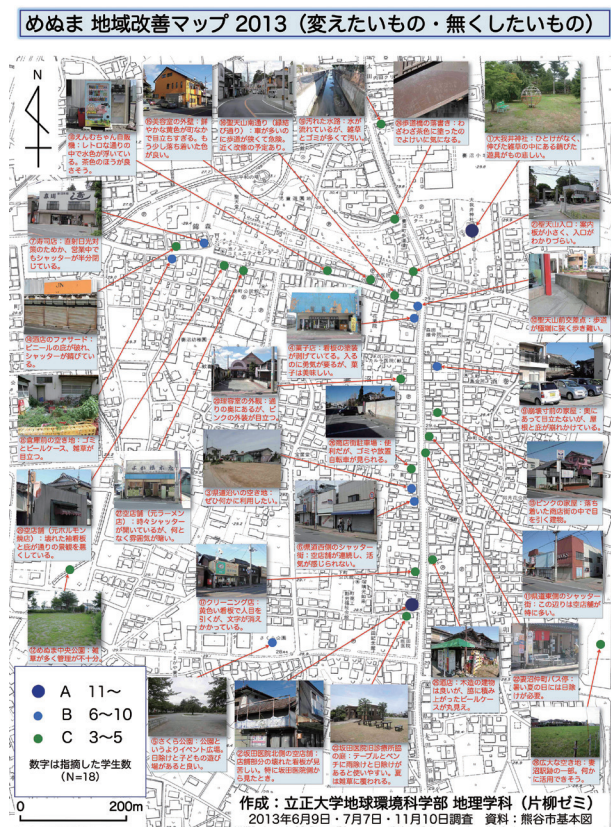


図4 「めめま地域改善マップ2013」(A4判)



写真3 「産学官連携まちづくりフォーラム」で発表
(2014年3月22日、筆者撮影)

もとに、観光まちづくりに対応した妻沼地区の都市構造案を発表した。フォーラムには地域連携の関係者をはじめとして学外から50人を超える参加者があり、地元の方のまちづくりに対する関心の高さをうかがわせた。また、学生にとっては、社会貢献を実感するまたとない機会となった。

(2) 観光情報の提供

当年度は、妻沼地区の地域資源・地域改善マップに加え、観光情報を提供するために町歩きマップを作成することとした。学生18名にそれぞれ原案を作ってもらい、

それを「町なかゼミ」で発表し、参加者に投票してもらった。その結果、18点の原案のなかから2点選ばれた。実際に印刷・発行したマップが「めめま町歩きマップ(グルメ編)」(A4判)(図5)、「めめま町歩きマップ(女子力編)」(A4判)(図6)である。それぞれのマップに、現地調査の成果と学生らしいアイデアが盛り込まれている。地域連携による社会貢献の一環として、これらのマップを熊谷市役所、熊谷市観光協会、くまがや市商工会、めめま商人会会員店舗を通じて配布した。

3. 2014年度の活動

(1) 学生取材観光パンフレットの作成

2012年度と2013年度の活動では、主に景観面から地域の改善点および地域の資源の掘り起こしを行った。そこで、2014年度は、妻沼地区の景観以外の側面に着目し、新たな視点で観光パンフレットを作成することとした。

教室内の授業では、初めにパンフレットのコンセプトについて互いに意見を出し合った。その結果、パンフレットでは「学ぶ」「見る」「食べる」「出会う」「集う」の5つの項目を立て、そのうち「食べる」「出会う」「集う」の3項目で、地域で活躍する「人物」を紹介することとした。作成にあたり、「学ぶ」の項目を担当教



図5 「めめま町歩きマップ (グルメ編)」 (A4判)



図6 「めめま町歩きマップ (女子力編)」 (A4判)

員(筆者)が担当し、それ以外の「見る」「食べる」「出会う」「集う」の4項目を学生14名で分担した。パンフレットで紹介する人物を事前にリストアップしたうえで、商工会職員の方から意見をいただいた。インタビューは基本的に学生2人1組で担当し、聞き取った内容に学生がコメントを付けて紹介する構成とした。取材は主に夏期休暇中に実施し、学生のインタビューに地元の方には快く応じていただいた(写真4)。

インタビューの原稿が出揃った時点でパンフレットの試作版を作成し、「町なかゼミ」(11月23日)で発表した。

写真4 人物紹介のためのインタビュー
(2014年8月30日, 筆者撮影)

ゼミでは、紙面構成やデザイン面などに対して地元の方から貴重な意見をいただいた。人物の写真およびインタビュー内容については、入稿の段階で取材対象者に確認していただいた。原稿の内容はほぼ修正なしであったものの、学生のインタビュー能力の未熟さからか、話の内容を正確に掴みきれずに修正に至った箇所もあった。

ゼミ生全員で完成させたパンフレットが、『地理学科学生取材 めめま観光読本。温かい人と美味しいものに出会える町 熊谷市妻沼の素敵な過ごし方』⁹⁾(図7)である。「食べる」「出会う」「集う」の項目で登場いただいた人物は、菓子製造販売業、製茶販売業、商工会職員など多岐にわたる。それぞれの地元に対する熱い思いが伝わる内容になっており、学生もそれに応えたコメントをしている。完成後の2015年3月19日(木)、熊谷市役所内で観光パンフレットの完成披露と贈呈式を行った。この時の様子は地元のケーブルテレビや新聞に取り上げられた。ゼミ活動が社会的評価を得たことで、学生の達成感にもつながった。また、『めめま観光読本』の一部は、埼玉県と熊谷市で進める「川まるごと再生プロジェクト『江袋溜井・福川地区』」の整備事業で設置された案内看板¹⁰⁾に利用された。



図7 『地理学科学生取材 めぬま観光読本。』（表紙）（A4判）

パンフレットの企画・立案から取材・完成に至るまでの経験は、学生のさまざまな能力やスキルの向上につながったのではないかと考えている。地元住民へのインタビューでは、日頃接する機会の少ない社会人と、まちづくりを話題に意見交換したことは貴重な体験となったようである。また、インタビューを通して地元で妻沼聖天山が「聖天様」と呼ばれて親しまれていること、その「聖天様」のもとで住民が人との縁を大切にしながら生活していることなど、景観観察だけではわからない地域の姿を知ることができたのは、学生にとって大きな収穫であった。

（2）学生運営観光案内デスクの設置

妻沼地区では、めぬま商人会の主催で昭和レトロをコンセプトとした「熊谷妻沼昭和まつり」¹¹⁾を開催している。そこで、観光まちづくりへの実践的な貢献として立正大学ブースを設置し、3年生を主要メンバーとして、町歩きマップの配布やアンケート調査、本部の運営補助などの業務を行った（表3）。

また、夏期休暇中に、地区内の商業店舗の一角に学生による観光案内デスクを設置し、ここを拠点に観光パンフレット作成に関する資料の収集を行うとともに、来街

表3 観光案内デスクの概要（2014年度）

【観光案内デスク1（熊谷妻沼昭和まつり）】	
日 時	6月22日（日）10：00～16：00
場 所	仲町商店街（虹色ハウスsugar付近）
参加者	学生16名（ローテーションで対応）
内 容	本部業務の補助、観光客の誘導、地域資源・町歩きマップの配布 アンケート用紙の配布と回収
【観光案内デスク2（夏期休暇中）】	
日 時	8月30日（土）・31（日）、両日とも10：00～16：00
場 所	熊谷市妻沼地区 「大福茶屋さわた」「茶の西田園」「めぬま館」
協 力	めぬま商人会、くまがや市商工会妻沼支所
参加者	学生10名（ローテーションで対応）
内 容	地域資源・町歩きマップの配布、アンケート用紙の配布と回収 観光パンフレット作成のための調査（一部）

者へのアンケート調査を実施した。イベントへの参加や観光案内の活動は、学生と地元住民との交流を深める良い機会となった。

4. 2015年度の活動

（1）道の駅のニーズから生まれた道案内マップ

2015年度は、国土交通省大宮国道事務所の支援を受けて、立正大学と道の駅「めぬま」とで連携企画型の実習を実施することとなった。具体的には、地理学科と道の駅「めぬま」とが連携して、「道の駅」と国宝「妻沼聖天山（歓喜院聖天堂）」を核とした地域活性化に向け、観光情報発信、観光資源マップの作成を行うというものである。

「道の駅」¹²⁾は地域活性化および観光の拠点としての役割が期待され、国土交通省では2015年度から「道の駅」と大学との連携の取り組みを開始した。その目的に、「道の駅」を若者の就労体験や交流の場として活用すること、「道の駅」と地域外の若者との交流で新たな価値の創造を図ることの2点をあげている（国土交通省）。連携には、プログラムの内容によって就労体験型実習と連携企画型実習とがあり、立正大学では後者のプログラムを実施することとした。連携企画の内容は、①新たな観光資源マップの作成、②学生による観光情報発信とした（表4）。

妻沼地区での初回のフィールドワークは、地域イベント「熊谷妻沼手づくり市」¹³⁾の開催日（4月26日）に合わせて行った。道の駅「めぬま」の施設内を見学して課題を探った後、妻沼聖天山に至るまでの景観調査を行った。大学に戻った後、現地調査の結果を踏まえて観光資

表4 立正大学と道の駅「めぬま」の連携企画の内容(2015年度)

①新たな観光資源マップの作成

- ・学生が「道の駅」から妻沼聖天山までのフィールドワークで地域資源を発掘
- ・「道の駅」と妻沼聖天山を拠点とする新たな観光資源マップに取りまとめ

②学生による観光情報発信

- ・イベント時に「道の駅」内に学生による観光案内デスクを設置
- ・「道の駅」を拠点とした観光モデルルートを紹介
- ・「道の駅」の来場者のニーズを、アンケート調査、分析により確認



図8 「妻沼観光案内図」(A3判)

源マップの作成内容について検討し、最終的に自動車利用者向け、徒歩または自転車利用者向けの2種類の道案内マップを作成することとした。これは、道の駅「めぬま」から妻沼聖天山までの道案内図を作成して欲しいという「道の駅」側のニーズに応えるものである。以後は、作成するマップ別に2つのグループに分かれて作業を進めた。

8月6日(木)～8日(土)に、道の駅「めぬま」をベースに道案内マップに掲載する地域資源の発掘に関する調査を行った。調査3日目の8日の午後には、地域住民を交えて「町なかぜミ」(場所:妻沼勤労福祉会館)を開催し、調査結果の発表と意見交換を行った(写真5)。また、季節ごとの地域資源を掘り起こすために10月18日(日)に調査を行い、その日の午後に自然環境の視点から地域資源を調査している学生グループを交えて意見交換を行った。



写真5 妻沼勤労福祉会館で調査結果を発表(2015年8月8日、筆者撮影)

数回におよぶ試作を経て完成したマップが「妻沼観光案内図(表面)・妻沼まちあるきマップ(裏面)」(A3判)(図8、図9)である。「妻沼観光案内図」には、道の駅「めぬま」から妻沼聖天山に至るまでの自動車利用



図9 「妻沼まちあるきマップ」(A3判)

のルートと聖天山周辺の駐車場情報を現地調査に基づいて掲載している。また、「妻沼まちあるきマップ」は学生の手書き文字を活かしたデザインとし、道の駅「めぬま」から妻沼聖天山までのルート上に、学生が選んだ季節ごとの地域資源を掲載している。後者のマップは、妻沼地区で進められる住民主体のまちづくりの特徴である「手づくり感」に合わせたものとなっている。

(2) 道の駅と妻沼聖天山をつなぐ情報提供

当年度は、妻沼地区内の複数箇所での観光情報の提供を

行った。5月24日（日）に「熊谷妻沼昭和まつり」が妻沼聖天山境内で開催され、イベントに合わせて学生運営の観光案内デスクを設けた。同日には、会場から1.5kmほど離れた道の駅「めぬま」内にも学生運営の観光案内デスクを設け、「熊谷妻沼昭和まつり」や妻沼地区に関する観光情報を提供した（写真6）。観光案内デスクには多くの観光客が訪れ、観光マップとまちあるきコースの企画提案に向けて貴重な意見が得られた。参加した学生からは「来場者に昭和まつりの情報や観光案内マップ（試作版）を提供でき、有意義な活動だった」との感想があった。このほか、夏期休暇中の調査に併せ、道の駅「めぬま」に観光案内デスクを設け、観光情報を提供した。



写真6 道の駅「めぬま」の観光案内デスク
(2015年5月24日、筆者撮影)

（3）連携成果の社会への発信

地域連携による教育活動では、社会への情報発信を重視している。「道の駅」との連携では、成果を発表する機会を2度持つことができた。1度目は、2016年3月14日（月）に開催された国土交通省関東地方整備局主催「道の駅と大学連携成果発表交流会」（会場：さいたま新都心合同庁舎）で、関東地方整備局管内にある12大学が集まり、各大学が「道の駅」との連携成果について報告した（写真7）。立正大学では、「妻沼観光案内図・妻沼まちあるきマップ」および自然環境勉強会作成の地域パンフレット「めぬま自然発見」について紹介した。国土交通省職員や他大学の教員・学生など大勢を前にした発表は、学生にとって貴重な経験となった。

2度目は、3月25日（金）に熊谷市役所にて連携成果の報告と贈呈式を開催したことである。報告会では、担当教員（筆者）の連携企画についての趣旨説明に続き、学生代表2名がマップとパンフレットの内容を紹介した。その後、「妻沼観光案内図・妻沼まちあるきマップ」「めぬま自然発見」の目録を熊谷市長に贈呈し、感謝状をいただいた。学生にとって、ゼミ活動が地域貢献につなが



写真7 「道の駅と大学連携成果発表交流会」で発表
(2016年3月14日、筆者撮影)

ることを実感する良い機会となった。

5. 2016年度の活動

（1）観光情報発信の多様化

地域連携による教育活動の5年目となる2016年度は、前年度と同様に立正大学（地理学科）と道の駅「めぬま」が連携し、地域活性化に向けて取り組むことを継続した。当年度の連携企画の内容は、①観光情報の発信、②外国人対象モニターツアーの実施とした（表5）。実施にあたっては学生18名の希望を尊重し、①と②のそれぞれのプロジェクトを担当するグループに分けた。さらに、①のプロジェクトを担当する学生11名を、観光PR動画制作グループと地域情報パンフレット制作グループの2班に分け、以後はグループ別に作業を進めた。なお、観光案内デスクの運営はゼミ生全員で担当することとした。

表5 立正大学と道の駅「めぬま」の連携企画の内容
(2016年度)

①学生による地域観光情報の発信
・「道の駅」内に学生による観光案内デスクおよび地域連携コーナーを設置
・「道の駅」および妻沼地区の紹介動画を制作
・市外の観光客をメインターゲットとした新たな地域情報パンフレットを制作
②外国人（留学生）対象モニターツアーの実施
・妻沼地区の体験プログラムツアーを企画、立案
・インバウンド対応

まずは、妻沼地区におけるまちづくり活動について理解を深めるため、「熊谷妻沼手づくり市」の開催時（4月24日）にフィールドワークを実施した。2度目のフィールドワーク（6月9日）では、連携関係者を講師役に妻沼勤労福祉会館にて勉強会を行った（写真8）。



写真8 地味の方を講師にまちづくり勉強会を開催
(2016年6月9日, 筆者撮影)

くまがや市商工会妻沼支所の廣瀬俊明氏から商工会におけるまちづくり活動について、熊谷妻沼手づくり市の発案者で主催者の高柳紀子氏から手づくり市についてそれぞれ説明していただいた。その後、現地を観察し、妻沼地区の課題を探った。

観光情報発信のプロジェクトでは、前年度に引き続き、道の駅内に学生による観光案内デスクを設置し、道の駅を拠点とした観光モデルルートを紹介した。併せて、道の駅内に常設の地域連携コーナーを開設し、地域連携に関わるポスターを掲示するとともに、前年度までのゼミ活動で作成した観光マップや観光パンフレットを配布した。

観光PR動画の制作では、著作権、肖像権、プライバシー権などの権利関係に配慮しながら、学生目線の3分動画を作成し、インターネット上（YouTube）にアップした（写真9）。また、地域情報パンフレットの制作では、市外からの観光客をメインターゲットとし、イメージ重視の観光パンフレットとすることを作成方針とした。妻沼地区の認知度を向上させる目的で作成したパンフレットが「めぬまっち」（A5判・観音折り）（図10）である。作成にあたって、学生は数度にわたる現地調査を行ったほか、写真の掲載許可の交渉も行った。このほか、「自然有志」グループが、身近な自然環境が学べるように工夫を凝らした「妻沼自然教室」を制作している。

前年度に引き続き、国土交通省関東地方整備局主催「道の駅と大学連携成果発表交流会」で活動の成果を発表するとともに、連携成果を地域へ還元するため熊谷市役所にて連携成果の報告とパンフレットの贈呈式を行い、熊谷市長から感謝状をいただいた。

（2）外国人対象モニターツアーの実施

当年度の新規プロジェクトとして、道の駅「めぬま」・めぬま商人会との連携による、学生企画・立案の外国



写真9 道の駅「めぬま」でPR動画を撮影
(2016年9月11日, 筆者撮影)



図10 観光パンフレット「めぬまっち」(表紙) (A5判)

人（留学生）対象モニターツアー（日帰り）を実施した（図11）。これは、近年の訪日外国人観光客数の増加とインバウンドの地方への波及を踏まえたものである。当プロジェクトを進めるにあたり、担当学生7名をツアー企画グループ、旅のしおり制作グループの2班に分け、ツアー当日は担当学生7名と希望学生が参加することとした。ツアーの募集では、大学の熊谷国際交流課の協力を得て留学生に参加を呼びかけた。その結果、18名（タイ3名、台湾1名、中国1名、ベトナム13名）の参加希望者があった。主催者側は学生12名、教員2名、職員1名が参加した。



主催：立正大学地球環境科学部地理学科片柳ゼミナール
 ◇ツアー実施日：2017年2月16日（木）10:00～16:00
 ◇集合場所：立正大学熊谷キャンパスステラ前
 ◇集合時間：10:00
 ◇問い合わせ先：片柳ゼミナール（代表：松澤 Mail:xxxxxxxx@ris.ac.jp）
 ※備考：お客様の個人情報は第三者に提供致しません。
 ツアー一席から連絡をとる必要がある場合のみに利用いたします。
 ☆協力：道の駅めま、めま商人会

ツアー参加申込書		
フリガナ	性別	年齢
氏名		
フリガナ	生年月日 西暦	年 月 日
現住所	電話番号	()

図11 モニターツアーの募集チラシ（表）（A4判）

モニターツアーの内容は以下のとおりである。2017年2月16日（木）午前10時、立正大学熊谷キャンパスを集合場所とし、貸し切りバスに乗って出発した。現地では、機動性を高めることと学生に主体性と責任感を持たせるため、留学生6名と学生3～4名を1グループとし、全3グループに分かれて徒歩で移動した。午前中は、学生の案内で町並みを見学した後、ボランティアガイド「阿うんの会」の説明で妻沼聖天山本殿を拝観した（写真10）。昼食は地元の自治会館で地元名物「いなり寿司」「雪くま（かき氷）」を食べながらの交流会とした。午後



写真10 「阿うんの会」のガイドで妻沼聖天山本殿を拝観（2017年2月16日、筆者撮影）

は「自然有志」グループの学生を案内役に利根川・福川堤防沿いを歩き、自然環境や水害について学習した。ツアーの最後にグライダー滑空場を見学し、午後4時過ぎに大学に帰着した。

このプロジェクトの教育上の効果をみると、ツアーの企画・立案・実施を通じて参加学生の主体性を引き出したことが大きな成果であった。事前準備のために現地に何度も足を運び、地元関係者と打ち合わせを重ねる学生も見られた。また、学生のインバウンドに対する関心が高まったことも成果の一つである。地域貢献のうえでは、妻沼地区のインバウンドに対する課題を明らかにできたことが収穫であった。

Ⅲ. 学生アンケートにみる教育効果

1. 事後アンケートの分析（2014年度）

地域連携による教育活動の効果を確認するため、併せて今後の学修指導の参考資料とするため、参加学生を対象に事後アンケートを実施した。2014年度のアンケートは、連携活動がほぼ終了した2014年12月22日の授業時に行った。3年ゼミ生11名（14名中）から回答があり、集計結果を表6に示した。なお、2014年度の活動ではゼミ生全員が単一プロジェクトに関わり、『めぬめ観光読本。』を作成した。

表6によると、11名中9名の学生が地域との連携活動に「積極的であった」「ある程度積極的であった」と答えており、活動に前向きに取り組んでいたことがうかがえる。また、連携活動を通じて社会常識や知識が身についたと答えた学生が10名、課題を発見する能力が「とても身についた」と回答した学生が5名、「ある程度身についた」と答えた学生が4名で、知識の習得や課題発見能力を向上させるうえで、地域での実践的な活動が有効であることを示している。一方、他者と討論する力が「あまり身につかなかった」と回答した学生が4名あった。

次に、各質問項目で「とても身についた」と回答した理由を表7に示した。問2の回答理由に「幅広い年代の方と交流することが出来たから」、問3の回答理由に「相手の話をよく聞き、自分の意見も話せる場がたくさんあったから」とあるように、地域住民との交流を理由にあげた回答が目につく。それぞれの回答理由からは、学生が実際に現地にでかけることで現実の課題に直面し、その課題について様々な立場の人とコミュニケーションを取ることができたこと、それが次の活動につながって

表6 学修達成度に関するアンケートの結果(2014年度)

単位:人

質問番号	積極的であった	ある程度積極的であった	あまり積極的ではなかった	消極的であった	合計
問1	4 36%	5 45%	2 18%	0 0%	11 100%
質問番号	とても身についた	ある程度身についた	あまり身につかなかった	身につかなかった	合計
問2	1 9%	9 82%	1 9%	0 0%	11 100%
問3	1 9%	6 55%	4 36%	0 0%	11 100%
問4	5 45%	4 36%	2 18%	0 0%	11 100%
問5	1 9%	7 64%	3 27%	0 0%	11 100%

問1 地域連携活動(正課授業ほか)にどの程度、積極的に関わりましたか。

問2 社会常識・学問的知識はどの程度、身につきましたか。

問3 他者と討論する力はどの程度、身につきましたか。

問4 地域課題を発見し、解決する力はどの程度、身につきましたか。

問5 主体的に行動する力はどの程度、身につきましたか。

(アンケート調査により作成)

表7 「とても身についた」と回答した理由(2014年度)

質問番号	回答理由
問2	幅広い年代の方と交流することが出来たから。
問3	相手の話をよく聞き、自分の意見も話せる場がたくさんあったから。
問4	課題を様々な意見から明確にすることができ、その対策方法をなかと共有して考えることが出来た。
問4	弥彦と妻沼、二つのモデルケースをサンプリング出来たから。
問4	視野が広がり、まちの問題点をちょっとしたことでも見つけられるようになったこと。
問4	解決するために様々な面から取り組めた。
問4	地域に出てやるやり方で、問題意識を感じることに。
問5	手づくり市以外でも地域の人と連絡を取り、交流できたから。

注:質問番号は表6に対応する。

いったことがわかる。また、「ある程度身についた」と回答した理由には、問2で「地域におもむいて学習していくことで、コミュニケーションをはかる機会が増え、同時に社会常識も向上したと思う」「コミュニケーションやインタビューの仕方が勉強になった」、問3で「地域の人々とコミュニケーションをとることで、色々なことが学べた」などがあげられた。地域と連携した活動を進めるなかで、地域住民と交流することによりコミュニケーション能力が向上したと自覚する学生の存在を示している。

以上のような前向きな自己評価がある一方、反省的な評価も見られた。そこで、アンケート調査で「あまり身につかなかった」と回答した理由を表8に示した。他者と討論する力が「あまり身につかなかった」と回答した理由では、「自分の意見を積極的に伝えること」「機会を増やす。自分から発言する」などのように議論の場での積極性の不足が主にあげられた。それぞれの回答理由か

ら、自ら積極的に発言することが少なく討論に参加できなかったこと、課題を把握できたものの、その先の解決策の提示まで進むことが難しいと感じた学生がいたことがわかる。

2. 事後アンケートの分析(2016年度)

2014年度の活動ではゼミ全体で単一のプロジェクトを進めていったのに対し、2016年度の活動では学生の興味関心に合わせて、グループごとにプロジェクトを進めていった。そこで、プロジェクトの違いが学習効果に差をもたらすかを確認するため、2016年度の参加学生に2014年度と同様のアンケートを実施することとした。2016年度のアンケートは、2017年3月31日の新学期ガイダンス後に配布し、後日回収した。3年ゼミ生17名(18名中)から回答があり、集計の結果を表9に示した。

表9によると、17名中16名の学生が連携活動に「積極的であった」「ある程度積極的であった」と答えてお

表8 「あまり身につかなかった」と回答した理由（2014年度）

質問番号	回答理由
問2	人と話すことをたくさん経験できたが、その際相手を思いやる気持ちが自分には不足しがちだ。
問3	討論する機会は、話を一方的に聞く機会が多かったため少なかった。
問3	自分の意見を積極的に伝えること。
問3	自分の意見を参考にして欲しいという考え方を変える。
問3	機会を増やす。自分から発言する。
問4	課題を発見できたが、解決することはあまり出来なかった。
問4	課題を発見できたので、解決策について考察する事が必要。
問5	地域課題や解決策を考えることができたので、行動方法も事前に学習し、積極性をもつことが必要であると考え。
問5	やらなければならない状態での動き方は学べたと思うが、船頭を他者にしてしまうケースが多かったため、自らが船頭となる積極性が必要と考えた。

注：質問番号は表6に対応する。

表9 学修達成度に関するアンケートの結果（2016年度）

単位：人

質問番号	積極的であった	ある程度積極的であった	あまり積極的でなかった	消極的であった	合計
問1	8 47%	8 47%	1 6%	0 0%	17 100%
質問番号	とても身についた	ある程度身についた	あまり身につかなかった	身につかなかった	合計
問2	4 24%	11 65%	2 12%	0 0%	17 100%
問3	2 12%	10 59%	5 29%	0 0%	17 100%
問4	4 24%	10 59%	3 18%	0 0%	17 100%
問5	4 24%	9 53%	4 24%	0 0%	17 100%

問1 地域連携活動（正課授業ほか）にどの程度、積極的に関わりましたか。

問2 社会常識・学問的知識はどの程度、身につきましたか。

問3 他者と討論する力はどの程度、身につきましたか。

問4 地域課題を発見し、解決する力はどの程度、身につきましたか。

問5 主体的に行動する力はどの程度、身につきましたか。

（アンケート調査により作成）

り、2014年度の学生と同様に活動に前向きに取り組んでいたことがわかる。また、連携活動を通じて社会常識や知識が「とても身についた」「ある程度身についた」と答えた学生が15名で、2014年度の回答結果と同様に、知識を習得するうえで、連携活動が有効であることを示している。課題を発見する能力については「とても身についた」「ある程度身についた」と回答した学生が14名で、そのうち4名が「とても身についた」と回答している。一方で、他者との討論する力が「あまり身につかなかった」と回答した学生が5名いた点が目につく。

各質問項目で「とても身についた」と回答した学生の理由を表10に示した。問2の回答理由では「多くの人々とコミュニケーションが取れてよかった」「地域の人々と深く関わることができたのがよかった」などがあげられた。問4の回答理由では「自分たちなりに地域貢献ができた」「フィールドワークを重ねることでしかわ

からない魅力や課題を発見することが出来た」などがあげられた。また、「ある程度身についた」と回答した理由では、問2で「実際に地域の人と話しをすることも多くあったので社会常識が身についた」「地域（妻沼）の方々と接する機会が多かった点」、問3で「社会経験豊富な大人の方々とたくさんお話ができたことが良かった」などがあげられた。これらの回答理由からは、地域との連携による活動に参加し、自らの資質の向上を実感する学生の姿がみえてくる。

一方で、反省的な自己評価も見られた。そこで、アンケート調査から、「あまり身につかなかった」と回答した学生の理由をみる（表11）。2014年度と同様に、「もっと積極的に行動すること」「自分から自発的に物事を提案し、行動すること」の理由が示すように、活動に積極的でなかったと自己分析する学生がみられた。

2014年度と2016年度のアンケート結果を比較すると、

表10 「とても身についた」と回答した理由 (2016年度)

質問番号	回答理由
問2	地域の悩みを解決させることは社会人でも重要なので、多くの人々とコミュニケーションが取れてよかった。
問2	まちづくりに携わる仕事がしたいので、それに関するノウハウを身につけられた。地域の人々と深く関わることができたのがよかった。
問2	動画の許可取りなどいまでする機会がなかったの。
問2	4年生の卒業論文の発表を聞き、様々な調査方法や考察を学ぶことができた点。
問3	自分の意見を言うだけでなく、相手からの意見や考え方から色々と学ぶことができた。
問3	企画を進行するにあたり、グループの皆と色々と話し合うことができた点。
問4	課題発見することは簡単であるが、それを解決させるのは非常に難しい。けど、自分たちなりに地域貢献ができた。
問4	フィールドワークを重ねることでしかわからない魅力や課題を発見することが出来た。
問4	地域の良さや改善点を景観から読み取る力が以前よりついた点。
問4	手づくり市について調べている。
問5	地元住民の方々、ゼミのメンバー同士で議論し合い、行動した結果、自分から何ごとにも進んで取り組む力を身につけることが出来た。
問5	アイデア提案や動画出演など積極的行動した。
問5	指示を受けずとも自ら考え行動し、取材、撮影ができた点。
問5	主体的に行動することで地域課題の根本を知ることができたから。

注：質問番号は表9に対応する。

表11 「あまり身につかなかった」と回答した理由 (2016年度)

質問番号	回答理由
問2	論文や文献をもっと読む。
問2	もっと積極的に行動すること。
問3	もう少し授業内で、グループ活動を行いたかった。
問3	もっと積極的に発言する。気になったことをそのままにしない。
問3	自分から考えを話したり、積極的な行動。
問3	討論した覚えがあまりないため。
問3	自分から積極的に質問したり、意見を出すよう心掛けること。
問4	課題を発見するよりかは魅力の発見に力を注いだ。妻沼の方々との討論会をもっとやるとおもしろいと思った。
問4	地域課題を発見することはできたが、解決するまでには到らなかったため、もっと地域調査を進め、解決策を考える必要がある。
問5	正直他人にまかせてしまう部分があったのは反省的である。自分のアイデアをもっと出して行動すべきであった。
問5	自分から自発的に物事を提案したり、行動すること。
問5	周りに流されず自分の意思を大切にしていく。
問5	自分から発言したり、自分から行動する。

注：質問番号は表9に対応する。

「課題発見能力が身についたか」の質問で、2014年度のアンケートで「とても身についた」と回答した学生が最多となっている点を除き、全質問項目ではほぼ同様の回答傾向を示している。アンケートの結果からは、プロジェクトの違いによる教育効果の差異は認められないといえよう。

事後アンケートの結果から、コミュニケーション能力、問題発見・問題解決能力、積極性に関して、学生は意識のうえでは向上したと捉えていることがわかる。地域の関係者とともにまちづくりに携わり、地域に貢献することで学生の意識が変化したことは、本活動の成果といえよう。一方で、両年度のアンケート結果とも、他者との

討論する力が「あまり身につかなかった」と回答した学生が他の質問項目に比べて多かったことは、活動の進め方に一層の工夫が必要であることを示している。

次章では、過去5年間の活動を踏まえ、地域連携による教育活動の意義と課題について検討する。

IV. 地域連携による教育活動の意義と課題

実際に地域に入り込み、地域と連携してゼミ活動を行うことのメリットは多い。最大のメリットとして、大学とは異なる学びの場を用意できることがある。まちづくりを進める地域そのものが教材となり、利害関係なしで

地元住民と交流することができる。連携する地域が大学に近接している場合、教員と学生は継続的に現地に入ることができる。これにより地域の関係者との信頼関係が深まり、さまざまな支援を受けて活動を円滑に進めることができる。妻沼地区での活動では、連携関係者の発表会やゼミへの参加、調査に対する助言のほか、現地で開催する勉強会やゼミの会場、研究調査の拠点として研修室などの施設の提供、観光案内デスクを設置するための商業施設の空きスペースの提供、各種マップやパンフレットの店頭への配置などの便宜を受けた。

2年目以降の活動からは、正課のフィールドワーク以外に現地調査に出かける学生、自主的に地域イベントの運営などのボランティアで出かける学生も現れた。なかには、4年次の卒業論文のフィールドに妻沼地区を選び、地元の方に調査の協力をしていただいた例もある。地域連携によるゼミ活動を進めるうちに、まちづくりに関わることの面白さを学生が実感したようである。

活動の終了後に、「地域に貢献しているという意識から、モチベーションが上がった」「活動時に、さまざまな立場の方と話をせざるを得ないため、社会人（店主や自治体職員ほか）との接し方を学ぶことができた」「観光マップや観光パンフレットを作成し、地元の方から感謝された」「地元の人と真剣にまちづくりに関して討論できたことがよかった」などの感想を学生から聞いた。利害関係の無い地域連携による活動が学生のモチベーションを高め、学習意欲の向上、コミュニケーション能力の向上につながったようである。地理学を学ぶ学生が関わる地域貢献として、地図やパンフレットを制作することも大切だが、学生が地域に入り込んで地元住民と共に考え・行動すること、すなわち地域住民との協働そのものに地域連携による教育の意義があると考ええる。

また、シラバスの「授業の目的」に則して言えば、教室で修得したアカデミックなスキルを、地域課題の発見から解決策の提示にいたる一連の作業のなかで、現地に即して身につけることができたのではないかと考えている。地理学の専門教育のうえでも、地域と連携してゼミ活動を行うことは十分に意義が認められよう。

一方で、次のような課題も見えてきた。①教員が個別に対応しているため担当教員の負担が大きく、モチベーションを維持することが難しい。②活動に対して学生に温度差がある。③継続的な活動費が必要で、特に連携する地域が遠隔地である場合は旅費の確保が必要である。④活動に対する地域住民の理解を得るには時間がかかる。⑤地域イベント参加は一時的な連携となりがちで、それ

を避けるためには企画・運営の段階から参加することが望ましい。⑥商店街と連携する場合、学生が活動できる土・日は商店の繁忙日であり、意見交換の時間を確保することが難しい、などである。

次に、地域連携活動を正課授業で実施する際の課題をあげる。①成績評価基準の設定が難しく、現状では調査レポートの内容、活動への取り組み姿勢等で評価せざるを得ない。②成績評価に加え、教育効果の検証が難しい。③活動が年度単位であるため先輩から後輩への知識やスキルの継承が不足しがちであり、活動の継続性を担保できない。④4年次になると就職活動や卒業論文作成に時間が割かれるため、活動に参加することができない、などである。

以上のように、地域と連携してゼミ活動を行うことのメリットは多いものの、活動に伴う課題は多岐にわたる。また、地域連携活動を正課授業で行うのがゆえの課題もある。これらの課題に対して一人の教員のみで対応することは難しく、大学全体、教員、学生、地域のそれぞれの立場から解決策を検討していく必要があると考える。

V. おわりに

本稿では、立正大学地理学科（片柳ゼミ）における、2012年度から5年間にわたる地域との連携による教育活動について紹介し、その意義と課題について検討してきた。

地域との連携による教育活動の第1の目的は、地域貢献を通じて学習意欲の向上、コミュニケーション能力や地域課題の把握・解決能力の向上など、学生の多岐にわたる能力やスキルの向上にある。活動に参加した学生は、観光マップや観光パンフレットの作成・配布、地域イベントへの参加と観光案内などの活動を通じて学内では得られない経験をした。また、現地調査や現地で開催したゼミでは、学生と地域住民との間で活発な意見交換が行われ、大学と地域との交流も活発化した。事後アンケートの結果は、多くの学生が自らの能力やスキルの向上を自覚していることを示している。本活動では、大学と地域との連携で教育活動を展開することの有用性の一端を示すことができたと考えている。

山邊（2016）は、アクティブラーニングが大学での学びと社会とのつながりを実感させる教育として十分な可能性と有効性を持つと述べているが、本活動においてその効果が得られたと考えている。一方で、ゼミ活動に積極的に参加できなかった学生が一部存在したことも事実

である。地域連携によるゼミ活動であればこそ、地域貢献の意義、地域と連携することの意義について十分に考える時間を学生に提供し、それにより学生のモチベーションを維持することが大切であると再認識した。

ここ数年、地域との連携による教育活動は広がりをみせている。地理学科内で同様の活動を行うゼミも現れたほか、地域と連携する学生主体のプロジェクトも立ち上がった。そうした学内環境の変化もあり、筆者はこれまでにやってきたゼミ活動を検証する必要があると考えた。本稿は地理学科のひとつのゼミの取り組みを紹介したものにすぎないが、地域連携による教育活動の成果をある程度検証できたのではないかと考えている。

2018年3月現在、筆者が勤務する立正大学では地域連携による教育活動に対応する全学的な仕組みは用意されていない。社会貢献が大学の「第三の使命」と示された直後の2005年10月に産学官連携センター（現在の研究推進・地域連携センターの前身）が設置されたものの、現在に至るまで地域での教育活動に対するサポートは十分とはいえない。地域に関わる教育活動が複数の学問分野にわたり、正課・課外を問わず地域との連携による教育活動が今後も増加する傾向にあることから、これらの教育活動を側面から支える全学的な仕組みを早急に整備する必要があると考える。具体的には、地域貢献と地域連携をキーワードとした全学共通の教育プログラムを整備することや、地域連携に特化した専門部署を設け、専任の教職員スタッフによる学内外のコーディネートを行うことなどがあげられよう。今後は、学内外の教職員や地域関係者と意見交換を重ね、これまでの活動で明らかとなった課題を克服する方策を模索しながら、地域連携による教育活動の望ましい在り方を探っていききたい。

注

- 1) たとえば、名古屋学院大学では2001年から2006年にかけて、大学が所在する愛知県瀬戸市で大学・学生・商店街が連携して商店街活性化事業を進めてきた。2007年からは、大学の移転にともない名古屋市熱田区で同様の活動を行っている（水野 2005）。また、滋賀県立大学では2004年から、文部科学省の「現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）」採択事業として学生が地域で活動するプログラム「近江楽座」を地域と協力して進めてきた（鵜飼 2011）。
- 2) 明治大学では、創立者出身自治体（鳥取県、山形県天童市、福井県鯖江市）と協力協定を結び、連携事業を進めてきた。また、2007年度から3か年にわたり全国5地域と広域地域連携事業に取り組んできた（明治大学社会連携機構

編, 2012）。

- 3) 国立大学では宇都宮大学地域デザイン科学部、愛媛大学社会共創学部、高知大学地域協働学部などがある。また、私立大学では大正大学地域創生学部、追手門学院大学地域創造学部などが新設された。
- 4) 「町なかゼミ」とは実習地で開く地元住民参加型の正課授業のゼミをいい、発表会を含む。
- 5) 国勢調査によれば、2000年10月1日現在の人口は過去最多の28,734であったが、2015年10月1日現在で24,875まで減少している。なお、妻沼地区の中心市街地とその周辺は人口集中地区を形成し、2015年10月1日現在の人口は5,911である。
- 6) 「産学官連携まちづくりフォーラム」とは、熊谷商工会議所・くまがや市商工会・立正大学・熊谷市の4者が、地域社会の発展と人材育成を目指す「協働によるまちづくり」の一環として毎年開催するものである。
- 7) 旧妻沼町が策定した「中心市街地活性化基本計画」の中心市街地の範囲とほぼ等しい区域である。
- 8) 「美しく、活気ある町 ‘めぬま’」の都市将来像は公式なものではなく、現地調査の結果を踏まえてゼミで独自に設定したものである。
- 9) 『めぬま観光読本。』はA4判全8ページのオールカラーで、印刷には立正大学地域連携センター研究支援費を使用した。
- 10) 熊谷市西別府地内「別府沼公園」、原井地内「江袋溜井多目的広場」の2か所に設置された案内看板に、「学ぶ」「見る」の2項目が載せられた。
- 11) 2012年から始まった地域イベントで、2015年度に第3回を開催した。2016年以降、休止中である。
- 12) 「道の駅」は国土交通省によって1993年に創設された制度で、2017年4月末現在で全国に1,117駅が存在する。
- 13) 妻沼地区在住の高柳紀子氏が2009年に店舗の空きスペースで始めたイベントで、当初9組だった出店者数は、縁むすび通り（埼玉県道59号羽生妻沼線）沿いの出店を中心に200組を超えるまでになった。2017年10月に第20回を迎えた。

文献

- 鵜飼 修 (2011): 大学と地域との連携によるまちづくり—滋賀県湖東地域 滋賀県立大学の取り組み, 季刊まちづくり, 31, 110-115.
- 大西正志・竹内康博・佐藤亮子・山口信夫・米田誠司・宇都宮千穂編 (2016): 『地域と連携する大学の挑戦 愛媛大学法文学部総合政策学科地域・観光まちづくりコースの軌跡』ペリかん社, 352p.
- 熊倉敬聡・長田 進・坂倉杏介・岡原正幸・望月良一・手塚千鶴子・武山政直編 (2010): 『黒板とワイン もう一つの学びの場「三田の家」』慶応義塾大学出版会, 239p.
- 国土交通省: 大学の課外活動やインターンシップ等の場として活躍する「道の駅」

- <http://www.mlit.go.jp/common/001061552.pdf>（閲覧日：2016年5月21日）
- 小林英嗣&地域・大学連携まちづくり研究会編（2008）：『地域と大学の共創まちづくり』学芸出版社，191p.
- 鈴木 誠（2004）：『大学と地域のまちづくり宣言』自治体研究社，103p.
- 地域と連携する大学教育研究会編（2012）：『地域に学ぶ、学生が変わる』東京学芸大学出版会，262p.
- 手塚 眞・福士正博・安川隆司（2010）：学生 の地域貢献—単位認定化を中心に，東京経大会誌，265，155-171.
- 水野晶夫（2005）：大学と地域との連携によるまちづくり—名古屋学院大学の事例を中心として，新都市，59（10），19-26.
- 明治大学社会連携機構編（2012）：『明治大学と五つの地域の人々の地域再生物語—飯田市・嬬恋村・新宮市・鳥取県・長和町』丸善プラネット，113p.
- 山邊昭則（2016）：学習者と社会の架け橋としてのアクティブラーニング，69-97. 永田 敬・林 一雅編『アクティブラーニングのデザイン：東京大学の新しい教養教育』東京大学出版会，256p.

Development and issues of educational activities conducted by community collaboration in Menuma, Kumagaya City

KATAYANAGI Tsutomu*

* Faculty of Geo-environmental Science, Rissho University

Abstract:

The aim of this paper is to introduce the educational activities by collaboration with the local community over 5 years from 2012, and to examine their significance and issues.

The purpose of the above activities is to heighten students' motivation for learning and to improve their generic skills, such as communicating, understanding and resolving regional issues, and also improve their academic skills. Students who participated in the activities gained valuable experience through specific activities, such as creating tourist maps and brochures, supporting for local events management, and guiding tourists. On the field survey and the seminars on-site, the students exchanged their views with the local residents actively. The interaction between the university and the local community has also become active. The result of the post questionnaire shows that many students are aware of improvement of their skills. In conclusion, the educational activities through collaboration with the local community have a positive effect on the improvement of students' skills.

Key words: Department of Geography, Educational activities, Community collaboration, Regional contribution, Kumagaya city, Menuma area